

未来につなげたい、大切な記憶

unforgettable memories leading us forward

文化庁文化財調査官（史跡部門） 長島愛生園を視察

世界文化遺産登録を実現するためには、文化財保護法により資産を保護する必要があります。私どもは、長島を国指定史跡として保護することが最適であると考えています。そこで10月28日午後、浅野啓介文化庁文化財第二課文化財調査官に国立療養所長島愛生園を視察いただきました。これは本法人の依頼にもとづき瀬戸内市文化観光課及び岡山県文化財課にて調整いただき実現したものです。

当日は、愛生園歴史館主任学芸員（世界遺産登録に向けたロードマップ委員長）の田村さんが愛生園内をご案内した後、自治会会議室にて中尾自治会長や愛生園幹部の皆さまを含む関係者と意見交換を行いました。浅野調査官からいただいた貴重なご意見を、今後の史跡指定に向けた学術調査に活かしていきます。



世界遺産登録に向けたロードマップ委員会 （愛生園WGとの合同会議）

昨年6月、厚生労働省は全国13の国立ハンセン病療養所に対して入所者自治会はもちろん地元自治体や民間団体とも連携してワーキング・グループ（WG）を設置・協議し、「歴史的建造物等保存対象リスト」を提出するよう求めました。これを受けて長島愛生園（山本典良園長）から協力依頼があり、本年度はNPOのロードマップ委員会と愛生園のWGを合同で開催することを決定。6月30日と10月5日に愛生会館でユネスコ世界文化遺産と世界の記憶の登録に向けた協議とともに、愛生園内の建物や土地、資料（文書資料や現物資料）の保存・活用について幅広い意見交換を行いました。2021年2月に本年度最後の合同会議を開催し、厚生労働省に報告を行う予定です。愛生園から委嘱を受けたWG構成員は次のとおりです。

（NPOロードマップ委員会委員及び愛生園関係者を除く。敬称略）

- 武久 顕也（瀬戸内市長）
- 服部 靖（裳掛地区コミュニティ協議会会長）
- 原 憲一（NPO理事長）
- 坪井 智美（瀬戸内市市民部長）

会議の詳細は、ホームページをご覧ください。



<https://www.hansen-wh.jp/news/423/>



ご寄付いただいた皆様（R2. 3. 18～R2. 11. 10）

多くの皆様からご寄付いただきました。誠にありがとうございます。

八幡智恵様	93千円	橋内武 様	50千円	仁木比佐子様	5千円
藤澤祥子様	10千円	安野豊 様	50千円	匿名様	金額非公開 4件
					合計11件 333,000円

～長島愛生園・邑久光明園 見学受け入れ状況について～

新型コロナウイルス感染対策を講じつつ、皆さまのご来園をお待ちしております。

	愛生園歴史館	光明園社会交流会館
休館日	月曜日・金曜日（年末年始等別途）	土曜日・日曜日（年末年始等別途）
開館時間	9:30～16:00	10:00～16:00
見学	要事前予約	要事前予約
入所者講話	新型コロナ感染対策を行い、受け入れ。学芸員による継承講話も可能。要相談。	新型コロナ感染対策を行い、受け入れ。要相談。
予約先	0869-25-0321（代表 担当：庶務課） 月曜日から金曜日の8:30～17:00 もしくは長島愛生園歴史館ホームページ「問い合わせフォーム」より。	0869-25-0011（代表 担当：庶務課） 月曜日から金曜日の9:00～17:00

※大島青松園は、当面の間、施設見学を中止しています。（2020年11月10日現在）

～動画が完成しました～

世界遺産登録に向けた短編PR動画3本が完成しました。日本語と英語の字幕を挿入しています。YouTube（ユーチューブ）に保存していますので、パソコンやスマートフォンからご覧ください。多くの皆様に私たちの活動をご紹介しますようお願いいたします。



【設立趣旨編（60秒）】
<https://youtu.be/kpP-mrCCCu0>



【記憶編（15秒）】
<https://youtu.be/c45rwQfIRfk>



【建造物編（15秒）】
<https://youtu.be/wzwHmTaWXk>



編集後記

■11月5日に開催された文化審議会世界文化遺産部会にて文科大臣から「我が国の世界文化遺産の今後の在り方について」が諮問され、世界文化遺産の持続可能な保存・活用や登録資産の多様性等に関する審議が始まりました。

■ユネスコへの推薦の前提となる暫定一覧表（現在6件が記載されており、内1件が推薦中）の見直しも必要に応じて審議される可能性があります。結果は2020年度内に取りまとめられる予定です。消滅が避けられない療養所コミュニティを誰がどのような枠組みで引き継ぐのかー私達も持続可能性の点に立った実効的な議論を進めねばなりません。

特定非営利活動法人
ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会事務局

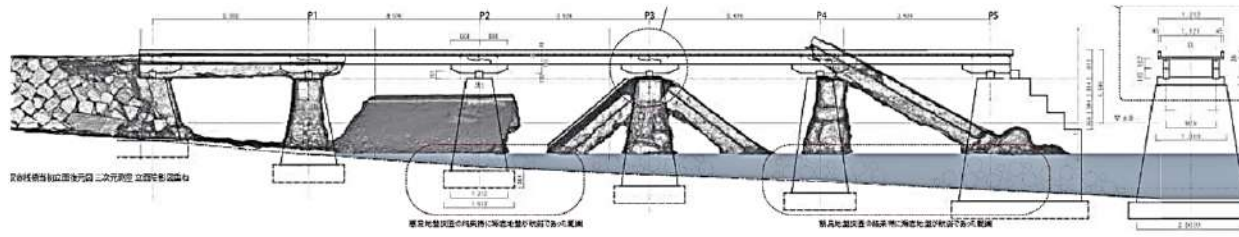
〒701-4501岡山県瀬戸内市邑久町虫明6253番地
（国立療養所邑久光明園旧入所者自治会館内）

TEL：0869-24-8872 FAX：0869-24-8873
email：hansen-wh.jp@aioros.ocn.ne.jp



開所日：火曜日～土曜日
閉所日：日・月曜日、祝日、振替休日、年末年始
開所時間：午前9時～午後5時

(2頁からの続き)
調査と測量の結果を、愛生園に保存されている新築時の設計図面と重ね合わせました。



「収容棧橋」(上)は劣化により、大きく崩れているが橋桁の基礎の大きな沈下は見られない。ただし、海底の周辺地盤で弱い箇所が複数確認できる。倒壊が一気に進む可能性がある。

「監房跡」(左)は約320㎡、8つの独房を持つ構造物だが大部分が土中に埋没している。土圧のみならず、雨水等による水圧にもさらされている。独房内部は土の転圧がなされていないため、道路や法面が陥没するおそれがある。(既に過去に数度の陥没が確認されている。) 現在見ることが壁面に水を逃がす小さな穴を開ければ、水圧を軽減することが可能である。

【邑久光明園「旧少年少女舎」】

9月から11月にかけて、建築家の皆さまと建築を学ぶ学生さん総勢30人による実測が行われました。



レーザー墨出器 (水平を示す赤い線)

実測後、手描き図面を作成



現在、実測で集めたデータを平面図・断面図・立面図・矩計図・展開図・小屋伏図としてまとめる作業を実施中です。引き続き保存修復と整備活用に向けた調査を進め、皆さまにも報告させていただきます。両園での調査の詳細な最新情報は、ホームページをご覧ください。



<https://www.hansen-wh.jp/news/399/>

歴史的建造物等の基礎的調査 (中間報告)
-保存修復・整備活用を目指して-

「長島」を世界文化遺産の構成資産候補とする場合、個々の構成要素を適切に保存管理することが必要です。そこで本年度と来年度、とりわけ倒壊・崩壊の危機に直面する長島愛生園「収容棧橋」「監房跡」、邑久光明園「旧少年少女舎」「二つの棧橋」の現状の調査し、保存修復と整備活用の素案を作成することにしました。今回はその進捗状況と中間報告をいたします。

本件調査は、会員の皆さまの会費やご寄付に加えて瀬戸内市に寄せられた「企業版ふるさと納税」「クラウドファンディング型ふるさと納税」を充てて実施しております。皆さまに改めてお礼申し上げます。

【長島愛生園「収容棧橋」「監房跡」】
7月29日から31日に以下の調査と測量を実施しました。



簡易地盤調査



ドローンによる写真測量



三次元測量

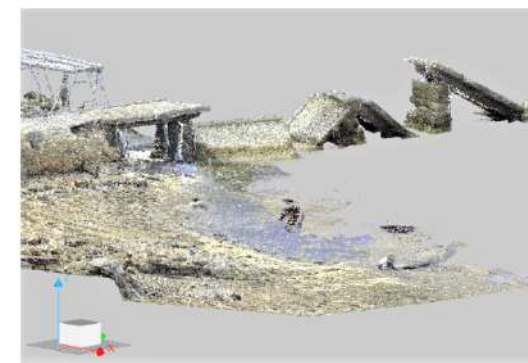
一秒間に数万のレーザーが対象に投射され、測量データを収集します。(左)

点として測量されたデータを収集することで画像のような成果図が表現されます。

(左下：収容棧橋)

(下：監房跡)

(5頁に続く)



～1936（昭和11）年と徳島～

正会員 雨宮 徹

私は新型コロナウイルスによるパンデミックが世界を覆いつつあった2020年4月、岡山県東部にある朝日新聞備前支局を離任し、徳島市の徳島総局に異動しました。2017年5月から3年弱にわたる備前支局在任中は長島に何度も取材に行き、その経験を四国勤務でも生かせないかと模索していました。

「阿波踊り」や「鳴門の渦潮」で有名な徳島。徳島とハンセン病との関わりは、それほど大きなものはないのではないかと赴任前は勝手に思い込んでいました。ところが県南部の阿南市出身の患者に、傑物が2人いたことを知りました。自分の不明を恥じるばかりです。

ご承知の方も多いと思いますが、私のように知らない方のために……。1人は「信仰」に身を捧げ、沖縄愛楽園（沖縄県名護市）の基礎を作った青木恵哉（けいさい）（1894～1969）。もう1人は「文学」を志し、川端康成に才能を愛され第3回芥川賞候補にもなった北條民雄（1914～1937）です。

まずは青木氏について説明します。青木氏がその半生をつづった「選ばれた島」（新教出版社）によると、彼は阿南市内の農家に生まれ、16歳の頃に発病が分かります。病気の平癒を祈って、19～21歳に3回、四国八十八カ所霊場まわりの旅に出ました。しかし病状は変わらず「幾度か人生に別れを告げようと思ったことだろう」。たまたま道連れになったお遍路さんから現在の大島青松園（高松市）を紹介されて入所し、そこでキリスト教と出会い、入信します。

その後、熊本市にあるキリスト教系の「熊本回春病院」に移ります。伝道こそが自分や他人の救いになるとの一念から、30代半ばの1927年に沖縄へ旅立ちました。

当時の沖縄での差別は本州よりも厳しかったと言われ、生者は投石を受けて土地を追われ、死者は生き返らないよう頭を下にして埋葬する習慣がある地域もあったそうです。

青木氏は療養所建設の必要性を痛感します。沖縄本島を徒歩や自転車で回って各地の患者と共同生活をし、回春病院の創設者から援助を受けた資金で屋我地島（やがじ）（名護市）の一部の土地を買います。しかし計画が知れるたびに住民たち

から立ち退きを求められ、焼き打ちにも遭いました。

このとき本州向けに発行されたパンフレットに青木氏が語った言葉「十坪でも一坪でも土地が欲しい。そこに立っていれば誰も文句をいわぬ土地が欲しい」は有名で、中央でもこの問題が取り上げられるようになりました。1937年には愛楽園の前身になる施設ができました。国内に十数カ所ある療養所のうち、「患者立由来」は愛楽園だけと言われる理由です。

受難は続きます。青木氏は待遇改善を求める入所者から暴行を受けることがありました。戦時中はキリスト教徒であることを理由に迫害を受け、戦争末期の沖縄戦では施設が爆撃を受け全滅します。

文芸にも親しんだ青木氏は晩年、こんな句を残しています。

〈痛み経て 真珠となりし 貝の春〉

愛楽園の園長も務めた医師の犀川（さいかわ）一夫氏は著書で「美しい真珠が生まれるまでにアコヤガイは『核入れ』によって体内に入れられた異物・棘の痛みを耐え、自らの体液で棘を包み、美しい真珠を作り出すという。青木さんは苦渋のかなたにやがて来る復活の春に望みを託し、苦渋を『心の真珠』に昇華させた」と評しています。

次ぎに北條民雄について。

作家・高山文彦氏の著書「火花 北條民雄の生涯」（角川文庫）によると、北條氏はソウルで生まれました。生後間もなく母が死に、阿南市にある母方の祖父母宅に預けられました。

早くから文学を志し、10代になると、家出同然に東京へ出奔しました。結核だった兄の死を受けていったんは故郷に戻り、家業の農業を継ぐため18歳で遠縁の女性と結婚。しかしこの前後に発病を知り、離婚します。1年に満たない結婚生活でした。

東京都東村山市にある全生病院（現・多磨全生園）へ行くことが決まりますが、日光・華嚴の滝への投身自殺を試みて失敗。1934年5月に入院します。

（次頁へ続く）

（前頁からの続き）

入院後は院内の機関誌に作品を書きますが、満足できず川端康成に手紙を書きます。「北條民雄小説随筆書簡集」（講談社文芸文庫）によると、北條氏は手紙で、ハンセン病が不治の病であること、自殺ができなかったこと、院内文芸にとどまらず「文学に生きたい」という強い意思があることを記し、作品を直接読んで欲しいと頼みました。思いもよらず川端から承諾の返事を受け取ります。

それから半年。川端へ最初に送った療養所内部を描いた作品「間木老人」は、川端の手によって1935年11月に文芸誌「文學界」に、小林秀雄、萩原朔太郎、中原中也といった名だたる作家に伍して掲載され、デビューします。

1936年初頭には、入院直後の日々を描き、代表作となる「いのちの初夜」が続けて「文學界」に載り、絶賛を浴びます。川端も手紙で「種々の意味で、私もこんなに嬉しいことはありません。万歳です」と賛辞を送っています。「いのちの初夜」は文學界賞を受賞し、第3回芥川賞候補になりました。

北條氏は1937年夏に最後の小作品「望郷歌」を執筆し、12月には腸結核と肺結核で生涯を閉じました。川端は自ら全生病院を訪れ、北條氏の遺体と対面しています。

さて、親子ほど年の離れた青木氏と北條氏の間には不思議な符合があったことを書いておきます。キーワードは「昭和11年」。

青木氏にとってこの年（1936年）は、前年12月28日に屋我地島にテントなどを張ることに成功し、愛楽園の前身施設が産声を上げるという節目になりました。

北條氏は「いのちの初夜」が発表・刊行され、川端とも鎌倉で初対面を果たしています。実質2年余りと言われた作家活動で最多作の年にもなりました。

2人の故郷・徳島にとっても、ある出来事が起きた年になります。手記「小島の春」で知られる医師・小川正子氏の来県です。愛生園で医師をしていた小川正子氏が四国（土佐）を訪れる途中、徳島に立ち寄り、長島にいる入所者の住宅建設のための寄付を募りました。愛生園に現存する十坪住宅5棟のうちの1棟である「徳島路太利」を含め、小川氏の徳島来県に由来する十坪住宅として「大宜都寮」「名西寮」が翌年にかけて計3棟建設されました。

1935年に創設されたばかりの徳島ロータリークラブの寄付金でできた「徳島路太利」が、現在、修復保存されつつあるのは皆さんご存じのことかと思えます。

そもそも昭和11年は、国外ではナチス政権下のドイツでベルリン五輪が開催され、国内では二・二六事件、岡山県では長島事件が起きるなど激動の年ではありました。それを加味しても、これほどの取材対象が手の届く場所にあるとは想像もつきませんでした。四国でも、点と点を線に、線と線を面にできるよう、ハンセン病をめぐるニュースを粘り強く発信していきたいと思っています。

最後に北條氏の随筆「柵の垣のうちから」より抜粋させて下さい。

〈だから私はもう少し癪を書きたい。社会にとって無意味であっても、人間にとっては必要であるかも知れぬ〉（原文ママ）

これは北條氏が、病気や療養所以外のテーマで作品を書いてみてはどうかと他人から薦められたことに対する、彼の心の声です。私自身もこの言葉を「読者にとっては必要かも知れない」と置き換え、書き続けたいと考えています。



2020年10月31日、朝日新聞の報道をきっかけに徳島ロータリークラブの泊健一会長（手前左）が長島愛生園にある十坪住宅『徳島路太利』を訪れ、約85年ぶりにクラブが残した遺産と対面した。クラブが寄付をした経緯が書かれた『徳島ロータリークラブ60年史』も同園入所者自治会の中尾伸治会長（同右）へ贈呈した。